第５課　イエスと地域支援

【暗唱聖句】

「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」マタイ4:23

【今週のテーマ】

今週は、イエスが世の光であるように、わたしたちもイエスの光を内側から輝かせ、この世の闇に光をともす働きができることを学びます。

【日曜日　イエスの宣教声明】

「イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。4:17 預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目に留まった。4:18 「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、4:19 主の恵みの年を告げるためである。」4:20 イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。4:21 そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた」（ルカ4:16～21）

「そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた」（ルカ4:21）とあるように、み言葉の成就を望むなら、まずみ言葉そのものに耳を傾けることが重要であることがわかります。み言葉はわたしたちを罪に捕らわれた状態から解放し、目が見えるようになって何が真理であるかを悟ることができるように導き、恵みを与え、圧迫から自由にする、生きた神の力です。その力が生活の中で実際に現れてくるのは、そのみ言葉を読み、信じた瞬間なのです。

イエスはこのイザヤ61章の言葉を2節の部分で中断されます。その理由は定かではありませんが、ガイドの著者は、その後につづく「神が報復される日」を、メシアが軍隊を率いてイスラエルを解放してくださると一般に多くの人が信じていた考えと結び合わせて考えてほしくなかったからではないかと解説しています。イエスはご自分が、弱者に対して深い憐みと恵み、そして救いの希望をもたらすために来たことに焦点を合わせられました。

【月曜日　隣人を愛すること】

「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」ルカ10:27

心を尽くして神と人を愛するということは、当時の一般的な考えでありましたが、問題となったのは隣人とは誰のことなのかということでした。律法の専門家は、同胞が隣人であり、それ以外は部外者であると考えていました。しかし、イエスはわたしたちの助けを必要としている人すべてが隣人であることを、「良きサマリア人のたとえ」で明らかにされました。

律法の専門家は、自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」（ルカ10：29）とイエスに問います。すると、イエスはたとえ話の中で、「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」（ルカ10:36）と、逆に尋ねられます。ポイントは、律法の専門家は「わたしの隣人とは誰か」と自分を中心に隣人を考えているのに対して、イエスは傷ついたユダヤ人を中心に、「誰がこの人の隣人になったか」と言っていることです。すなわち、助けを求めている人、愛を必要としている人はどのような人であろうと隣人だということです。私が基準ではなく、助けを求めている人が基準なのです。

【火曜日　食材のすべて】

「あなたがたは地の塩である」マタイ5:13

イエスは私たち一人ひとりに「あなたがたは地の塩となりなさいではなく、地の塩である」と言われたことに注目しましょう。このみ言葉はわたしたちの努力目標ではなく、わたしたちがすでにどのような存在であるのかを教えているのです。

地の塩から考えられること

１、周囲のものを素晴らしいものに変える力があるということ

２、塩そのものは引き立て役、目立たない存在かもしれないが、じわっと影響を与えていく

３、塩は他のものを混ざることで、その力を発揮する。塩のまま固まっていても意味がない

この塩は、キリストの愛を象徴している。

「もし、塩のききめがなくなったら、すなわち口さきだけの敬虔で、キリストの愛がなかったら、そこにはよいことのために何の力もない。その生活は世の人たちに救いの感化を及ぼすことができない」各時代の希望中P218、219

【水曜日　農夫であること】

「あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言っておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている。既に、4:36 刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである。4:37 そこで、『一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる』ということわざのとおりになる」マタイ4:35～37

一人の魂を主に導くとき、多くの人がその働きに携わっています。仮に、伝道集会が催されて、そこで決心者が与えられたとした場合、その伝道集会だけで救われたのではなく、そこに至るまでの過程があります。その過程が重要であり、そこに多くの人が携わっていくのです。だから、収穫の喜びを共に分かち合うことができるのです。イエスは伝道の働きを農業に例えています。農夫の働きは実に様々です。最後の収穫は一瞬のことですが、そこに至る前は長く、苦労が多いものです。しかし、その苦労を分かち合ってきたものは、収穫の喜びに、共にあずかることができるのです。この喜びは、主の喜びです。

【木曜日　教会の設立】

「帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。10:10 旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である」マタイ10:9，10

イエスはお金や着替えを持たないで伝道に出かけるようにと言われましたが、これは神だけを頼ることの重要性を学ばせようとしてのことでした。「働く者が食べ物を受けるのは当然である」とあるように、神様は必ず働き人の生活を支えてくださいます。